

自 由 記 載

○ 中学校に決まった場合、工事期間は廃校になった小学校を使うのも一つの家だと思います。

○ 20 年 30 年後には、現在の高校生以下の少数の子供達がこの村を背負っていかなければならない。人が減れば財政も、運営も厳しくなるだろうから、今は、学校建設に過剰な費用をかけない方が良いのでは。できる限り、今ある土地、設備を利用した建設が望ましいと思います。(既に廃校した学校、保育園、教員住宅等含む) 又、新校舎建設により廃校となった土地、建物の管理費用についても考慮し、新校舎を建てるのが、今後生きていく子供達の負担にならないようにすべきと思う。

○ 令和 11 年度開校を目途として取り組んでいることは理解するが、11 年度開校ありきで検討や議論を蔑ろにするべきではない。

○ アンケートを実施しろということではないが、もっと村民、特に保護者や若者の関心をえられる様に情報発信をすべき。教育方針に関しても。

○ 周辺、関連施設へのアクセス

○ 九戸村に唯一となる村立学校は、村の中心部伊保内地区に置くべきと考えます。これまでとは違い、保育園を卒園したばかりの子供たちがその後 9 年間で過ごす場所になります。勉強するだけではなく。人間形成の重要な 9 年間で。その 9 年間、登下校時の見守りをはじめ、九戸村の未来そのものである子供たちが地域の人と触れ合い地域の人に見守られる環境は、子供・村民双方にとって重要だと考えます。それは「伊保内地区限定の話」、と言われるかもしれませんが、小・中学校の統合により日常的にその光景が伊保内地区だけになってしまったからこそ、最後の一つを皆で全力で守らなければいけないと思います。

伊保内地区に整備することにより、中学生の姿も見られるようになり、活気の醸成が期待できると思います。そう単純簡単な話ではないでしょうが、逆の場合、中心部から子供たちの姿が消えた場合を想像すると、活気は失われ衰退が加速するのは容易に想像されるではないでしょうか。

この委員会は、あくまでも「学校建設用地検討委員会」ですが、九戸村唯一となる小・中学校建設と九戸村の存続・発展を切り離して考えることは出来ないと思います。むしろ九戸村立小・中学校を中心に据えて「誰もが住みたい、住み続けたい九戸村」の実現を目指していただきたいと思います。子供たちが地域との繋がりの中で育まれ愛着を持ち、巣立った後に戻って住み続けたいと思える九戸村に。